

昭和初期の流行語「イット」にみる働く女性たちへのまなざし

小関 孝子

The Buzzword “IT” in the Early Showa Period and a Gaze at Working Women

Takako OZEKI

要旨：昭和初期の流行語「イット」は、1927（昭和2）年公開のアメリカ映画「IT」から派生した。「イット」の意味は「性的魅力」と解説されることが多いが、実際の使われ方をみるとその意味の範囲は次第に拡大されていた。1930（昭和5）年頃になると、流行語「イット」の意味は、映画のストーリーや主演クララ・ボウ（Clara Bow）のイメージから離れ、都市部に登場した新しい職業で働く女性たちを批評する際に用いられるようになっていった。性的な対象として見られていたのは、酒類を提供する飲食店に勤めていた女性たちばかりではない。タイピスト、マネキン・ガール、百貨店の店員やバスの車掌までもが「イット」の有無によって評価された。流行語「イット」がどのような文脈で使用されているのかを分析することで、女性が人前に立つ職業に就きはじめた当初から性的なまなざしの対象となっていたことが浮き彫りになった。

キーワード：イット、クララ・ボウ、モダンガール、モガ、マネキン・ガール

1. 「イット」が流行った昭和初期という時代

昭和初期の流行語「エロ」「グロ」「ナンセンス」を知っていても、「イット」を知っている人は多くない。「エロ」「グロ」「ナンセンス」には、近代文学、美学、風俗史の分野で豊富な先行研究がある一方で、「イット」はこれまで学術研究の対象になっていない。流行語「イット」が使用された時期が1927（昭和2）年から1933（昭和8）年頃までと短く、それ以降は使われなくなっているからであろう。かつて筆者はカフェーの女給の研究を進めるなかで、昭和初期の史料に記載されている「イット」という言葉の意味がわからず頭を悩ませた。「イット」が俗語かつ隠語として使われていたことから、その意味をつかむためには、実際に「イット」を使用している当時の言説をかき集め、文脈からその意味を読み解く必要に迫られた。本稿は、その際に集めた「イット」に関する同時代史料を読み直し、「イット」が流行した背景に見えてきた当時の世相をまとめたものである。流行語「イット」は、もともとは1927（昭和2）年公開のアメリカ映画「IT」から派生した言葉である。当時、「イット」の意味は「性的魅力」と解説されることが多かったが、実際の使われ方をみるとその意味は「性的魅力」よりも広い範囲に及んでいる。

実のところ、特定の時期だけ爆発的に流行って消えていった言葉というのは、世相を捉えるためにはたいへん使い勝手がいい。その時代の価値観を捉える目印として使うことができるからである。流行語の発生と広まり方、そして流れ着く方向を確認することで、世の中の雰囲気や世相といった捉えどころのないものを具体的にイメージできるようになる。そこで本稿では、「イット」という流行語がどのような意味を持ち、どのように概念を変え、どのような文脈で使用されるようになるのか、そのプロセスを明らかにする。先に結論を述べてしまうと、「イット」という言葉は、結局「エロ」と同義になり、女性たちを「品評」する隠語として使用されるようになっていく。流行語「イット」の言説をたどれば、当時社会で活躍しはじめた女性たちがどのように見られていたのか、彼女たちに向けられたまなざしを明らかにしてくれるだろう。

ところで、「イット」が流行った昭和初期とはどのような時代だったのだろうか。昭和初期の東京は、1923（大正

12) 年9月1日に起こった関東大震災からの復興で、新しい東京の姿が現れはじめた時期であった。モダン都市の中心となった銀座では、1924(大正13)年12月に松坂屋が、1925(大正14)年5月に松屋が開業した。二大百貨店の銀座進出により、銀座はわざわざ出掛ける最先端の街としてその名を全国に轟かせた。銀座にカフェが乱立するようになったのは震災以降のことであるが、その背景には二大百貨店の進出がある。それまで小売業を営んでいた専門店が百貨店との競争を避け、飲食店に鞍替えしたり不動産賃貸業に転業したりした結果、銀座にカフェが急増したのであった(小関2023:72)。

昭和という時代が不況とともにやってきたことも忘れてはならない。1927(昭和2)年の昭和金融恐慌、1929(昭和4)年の世界恐慌、1930(昭和5)年の昭和恐慌と、震災復興もまだ終わらないうちに日本の景気は悪化の一途をたどっていった。1929(昭和4)年に公開された小津安二郎の映画「大学は出たけれど」は当時の就職難を描いた映画であり、この言葉は流行語にもなった。景気が悪くなるにつれ、購買欲を刺激しようと世の中は大衆的で世俗的な商品であふれかえった。巷には「エロ」や「グロ」や「ナンセンス」がはびこった。「イット」という言葉が流行った昭和初期の日本は、売り上げを確保しようとする経営者たちがなりふり構わず商機を掴もうとしていた時代なのである。新聞雑誌の特集記事や書籍なども、通俗的で大衆的な内容が急増した。「イット」という流行語は、そのような時代背景のなかで使用され、消費されていった言葉なのである。

2. 流行語「イット」のもとになったアメリカ映画「IT」とクララ・ボウ

流行語の元となったのは、1927年に公開されたアメリカの無声映画「IT」である。アメリカでは1927年春に公開され、日本でも同年の9月に公開されている。2023年現在、映画「IT」は既にパブリックドメインとなっているため、インターネット上で全編を視聴することができる⁽¹⁾。

映画「IT」の原作を書いたのは、大衆恋愛小説の作家として名を馳せていたエリノア・グリーン(Elinor Glyn)である。エリノア・グリーンが1927年に「It」というタイトルの小説を雑誌*Cosmopolitan*に掲載したのが最初である(D. Ledger 2018:10)。小説の主人公は庶民階級出身の金持ち男性である。その男性がお金に困っている富裕層出身の女性に恋をして、最終的に結ばれるというストーリーである。小説が発表される前年の1926年からすでに映画化の話しが進行し、主演には当時注目されはじめていたクララ・ボウ(Clara Bow)を起用することが決まった(D. Ledger 2018:15、H. A. Hallett 2022:361)。エリノア・グリーンは同作の映画化に際し、クララ・ボウ主演に合わせて小説とは別のストーリーに変更したのである(H. A. Hallett 2022:363)。

映画ではクララ・ボウが演じる百貨店店員の貧しい女性が主人公である。彼女が恋をする相手はその百貨店の経営者で、店員たちの憧れの的である。主人公は彼を振り向かせようと、あの手この手で近づいていく。小説と映画のストーリーは異なっているが、テーマはどちらも「IT」を持った男と「IT」を持った女の恋愛劇なのである。

ところで、ここで言う「IT」とはいったい何を意味しているのだろうか。「IT」について、作者のエリノア・グリーンは映画の冒頭で著名入りの文章を示し、次のように解説している。

“IT” is that quality possessed by some which draws all others with its magnetic force. With “IT” you win all men if you are a woman — and all women if you are a man. “IT” can be a quality of the mind as well as a physical attraction. (筆者訳: “IT”とは、あらゆる人を引き寄せる磁力のような性質のことである。“IT”があれば、女性であればあらゆる男性を、男性であればあらゆる女性を魅了することができる。“IT”とは、身体的な魅力のみならず、心の性質でもあるのである。)

この説明によると、エリノア・グリーンは、無意識のうちに異性を引き付けてしまう魅力が「IT」であり、「IT」を持っている男性もいれば「IT」を持っている女性もいると述べている。実際に原作の小説では、主人公の男性が「IT」を持った人物であるというところから物語がはじまっている。エリノア・グリーンが考える「IT」は、女性の魅力に限った言葉ではないのである。

ところが、まぎらわしいことに、映画の本編がはじまると別の説明文が画面に示される。脇役の男性がおもむろに小説「IT」が掲載された雑誌 *Cosmopolitan* を手にとり、「IT」の説明文が画面いっぱい映されるのである。そこに書かれている説明文は、前述した署名入りの解説とは若干表現が異なっている。*Cosmopolitan* の誌面として示されている文章は、次の通りである。

“IT” is that peculiar quality which some persons possess, which attracts others of the opposite sex. The possessor of “IT” must be absolutely un-selfconscious, and must have that magnetic “sex appeal” which is irresistible. (筆者訳：「IT」とは、異性を惹きつける特質のことである。「IT」を持っている人は、その自覚はまったくなくとも、たまたま魅力的な“セックス・アピール(性的魅力)”で人を惹きつけるのである。)

この説明文に“sex appeal”という表現が用いられていること、そして映画版では主人公が女性であることなどから、「IT」の意味が、日本においては「性的魅力を持った女性」として普及していったのである。(日本における「イット」という語彙の流行については後述する。)

映画「IT」が流行語を生んだという現象は本国アメリカでも起きていた。それが“it girl”という言葉である。「IT」が公開されるとクララ・ボウは新進気鋭の人気女優となった。クララ・ボウはジャズエッジを象徴するフラッパー女優のひとりに名を連ねることとなり、クララ・ボウが演じるお転婆でセクシーな若い女性を“it girl”と称するようになったのである。“it girl”という表現は、現在でも主にアメリカで使用されている。辞書でその言葉を確認すると、オンライン版 Cambridge Dictionary には、“a famous young woman who is known for going to a lot of parties and social events (多くのパーティーや社交イベントに出席することで知られる有名な若い女性)”と書かれている⁽²⁾。また、オンライン版 Oxford English Dictionary では、1927年以降に登場した言葉であるとして明示され、“A woman who is very famous, fashionable, or successful at a particular time, esp. (chiefly U.S.) a glamorous, vivacious, or sexually attractive...”(ある時期に非常に有名で、ファッショナブルで、または成功している女性、(主にアメリカ)、グラマラスな、快活な、性的に魅力的な...)と記載されている⁽³⁾。



(写真1) 映画「IT」のワンシーン。右がクララ・ボウ。https://en.wikipedia.org/wiki/It_(1927_film) (2023年11月1日閲覧)より。

オンライン版 Oxford English Dictionary では、1927年以降に登場した言葉であるとして明示され、“A woman who is very famous, fashionable, or successful at a particular time, esp. (chiefly U.S.) a glamorous, vivacious, or sexually attractive...”(ある時期に非常に有名で、ファッショナブルで、または成功している女性、(主にアメリカ)、グラマラスな、快活な、性的に魅力的な...)と記載されている⁽³⁾。

左の〔写真1〕は映画「IT」のワンシーンである。レストランで食事をするようになった主人公(クララ・ボウ)が、レストランに相応しいドレスを持っていないため、友人に頼んで服をハサミで切ってもらい、ドレスにみせようとしているところである。コミカルなシーンでありながら、胸元が大きく露出されるなど、観客をひきつける演出がされていることがわかる。

3. 日本における映画「あれ」とクララ・ボウの反響

映画「IT」は、日本では「あれ」というタイトルで1927(昭和2)年9月公開された。映画「あれ」は公開されるやいなや日本でも社会現象となった。しかし本稿では、クララ・ボウの人気と「イット」という言葉の流行を分けて考える必要がある。これらの現象を時系列に沿って確認するために、まずは映画のヒットとクララ・ボウのイメージの普及について整理しておこう。

(1) クララ・ボウの人気ぶり

映画「あれ」は、公開前の8月頃から新聞や雑誌で映画の紹介が大きく取り上げられている。既にクララ・ボウが

注目の女優だったことがうかがえる。クララ・ボウは、1927（昭和2）年春に日本で公開された「人罠」（原題：Mantrap）によって映画界の注目を集めていたようである。1927（昭和2）年4月1日号の『松竹座グラフィック』には、高田勝による「クララボウを讃める」という記事が掲載されている。高田は「正真正銘生一本の超モダン嬢クララ・ボウをスクリーンに見給へ（高田1927：14）」と絶賛している。藤木秀明によると、クララ・ボウが出演する映画作品は、1927（昭和2）年3月に関西で公開された「猿飛カンター」（原題：Kid Boots）以降の作品は全て日本で上映されている（藤木2000：10）。

「あれ」が公開されると、クララ・ボウは日本でも爆発的な人気を手に入れた。映画関連の雑誌は競うようにクララ・ボウを誌面に掲載した。二戸儂秋は雑誌『劇と映画』1927（昭和2）年12月号で中表紙を飾ったクララ・ボウについて「實際彼女の此の頃の人気と來たら、それこそ古い形容詞乍ら朝日の昇る如き勢ひです。（中略）新時代の女、新感覚の女、クララ・ボウは確かに嬉しい存在ではありませんか。（二戸1927：9）」と述べている。また、1928（昭和3）年5月に刊行された飯島正『シネマのABC』の巻頭グラビアの1ページ目にはクララ・ボウのポートレートが掲載されている。これらのことからクララ・ボウの当時の人気ぶりがよくわかる。

(2) モガファッションのアイコンとしてのクララ・ボウ

クララ・ボウの人気は、銀座にあつまる若い女性たちのファッションにも影響を与えた。関東大震災から復興を遂げた新銀座には、洋装に身をつつんだ「モダンガール」あるいは「モガ」と呼ばれる若い女性たちが闊歩するようになっていた。彼女たちが手本にしていたのは、クララ・ボウをはじめとするアメリカ映画のスターたちであった⁽⁴⁾。

小野田素夢は1929（昭和4）年12月発行の『銀座通』で「洋装断髪の街頭嬢の現はれたのは昭和三年の初夏の頃である。（小野田1929：58）」と述べている。「昭和三年の初夏」ということは、クララ・ボウ主演の「あれ」が流行した次の初夏から洋装断髪が登場したということになる。圓谷弘は1928（昭和3）年6月に刊行された『カフェー文化の諸現象』のなかで、当時の典型的なモガファッションについて、以下の通り詳細な説明をしている。

丸顔に人造皮膚ともいはいしき赤の丸を附したる頬を中心に、漸次遠心的にその白と赤との混色を見せ、而も桃割の明治娘のおもかげは何處へ行つたのか、ツツルテンの散髪で、而かも下部の耳を少しく見せるを以て良とし、かくして断髪は娘は耳よりうなじ至つて三十度高くなり、従つて髪生際は判然と外に表現してござる。口には燃えん許りの眞赤の紅をつけ、而かも眉には黒々と墨を入れ、加ふるに色で對照美の發揮にもと笑くほのあたり、ぼつつりと黒子の小點を圓く（圓谷1928：20）

圓谷のいうモガファッションの風貌は、クララ・ボウに代表されるアメリカ映画のフラッパー女優そのものである。安藤更生は、「銀座の外國文化の吸収力は速く且強いのである。（中略）ニユウヨルクの青年がクララボウに現を抜かしてゐると、我々も同じ時に邦樂座にボウの艶姿を眺めてゐるのである。（安藤1931：51）」と述べ、銀座では海外の流行がすぐに反映されることを、クララ・ボウの名前を例に挙げながら説明している。クララ・ボウは日本におけるモダンガールのアイコンだったのである。

右の〔写真2〕は1931（昭和6）年刊行の安藤更生『銀座細見』巻頭ページに掲載されているモダンガールの写真である。膝までのスカートをはき、足元はパンプス、深く帽子をかぶった姿は、まるでアメリカの映画の登場人物のようである。



〔写真2〕銀座を歩くモダンガールたち。
安藤更生『銀座細見』（1931）より。

4. 映画から離れて浮遊するモダン語「イット」

映画「IT」は「あれ」という邦題で日本公開されたのだが、流行語となったのは原題にちなんだ「イット」であった。では、「イット」という流行語はどのように広まっていったのであろうか。流行語としての「イット」は次第に原作者エリナ・グリンの解説からもクララ・ボウのイメージからも離れ、単に「性的魅力」を意味する隠語という性格を強めながら普及していった。ここでは、当時の新聞、雑誌、辞書、辞典、用語集などの「イット」の解説を確認し、社会現象としての「イット」を捉えたい。

(1) 隠語として使用される「イット」

映画のストーリーから離れて「イット」という言葉が「性的魅力」を表す流行語として広く認知されるようになるのは、1930（昭和5）年頃のことである。おそらく映画「あれ」が上映されて以降、英語が読める一部の人たちが映画内での語彙の説明を引用し、“sex appeal”すなわち「性的魅力」を意味する隠語として使用しはじめたのであろう。しかし、実際の使用例を確認すると、その意味は「性的魅力」の範疇を超えていることがわかる。いくつかの例を確認してみよう。

使用例1として、小野田素夢は「ステッキ・ガール」と呼ばれる散歩の同伴をして代金をとる女性が登場したという話題に触れ、「ステッキ・ガールはストリート・ガールの變形といへばいへるけれども、目的がイットにあるのではなくて、単なる散歩同伴にあるところに多分の近代性がある（小野田1929：66）。」と述べている。ここで使用されている「イット」は「性的なサービス」の代わりに使用されている。

使用例2としては、1930（昭和5）年6月に刊行された羽太鋭治『イットの研究』に注目したい。同書の内容は、医学博士・羽太鋭治による性に関連する医学的な解説書である。医師としての専門知識を一般向けに記したもので、女性器、月経、性行為などについて解説されている。現在の良識に照らせば問題のある表現が散見されるものの、硬派で真面目な内容である。総ページ数は385ページにおよぶが、実は、本文中には「イット」という語彙は一度も使用されていない。それに関わらず、『イットの研究』というタイトルとなっているのは、販売部数を伸ばそうと目論んだ出版社の戦略によるものと思われる。1930（昭和5）年6月9日付の『讀賣新聞』には同書の広告が大きく掲載されているが、そこには次の宣伝文が付されている。

一九三〇年はまさに「イット」の氾濫時代だ！だが、イットとは一體なんだ!! それは無遠慮に赤裸々に皮をひんむいてみねば判らない。しかも科学的に精密でなければならない。その研究は情緒豊かにモダンでなくてはならぬ。モダンはそのらのすべてを愛し又要求してゐる。そういう凡ゆる条件を備へてここにその虎の巻が現れた!! 男性よこれを読んであれの正體を、きわめよ！諸君の人生觀は百パーセントの現實的なものになるのだ。而して華やかな健かな彼女をつかめ!!（『讀賣新聞』1930年6月9日）

この宣伝文における「イット」は、「性的魅力」でも「性的なサービス」でもなく、「性」あるいは「女の身体」という意味で用いられている。著者・羽太が意図する本の内容とはかけ離れた宣伝文になっていることがわかる。

1930年頃になると「イット」が流行語として広まりはじめ、各メディアが用語解説を掲載しはじめた。明治以降の辞書の復刻版である『近代用語の辞典集成』（大空社）全41巻を確認すると、「イット」という用語が掲載されている巻は、12～23巻、32巻、34巻、36巻、37巻、40巻、41巻に及ぶ。そのなかで掲載時期が最も古いのは、41巻に所収されている『文藝春秋』1930（昭和5）年5月1日号の「モダン百語辞典」である。そこには「イット」の説明に次のような文章が記されている。

クララ・パウ主演エリナ・グリン原作の映畫の題より來る。性的魅力。ひきつける何か。（イットウ好いものなどと洒落てはいけない。「あいつはイットセルフ（イットそのもの）だ。」などと云ふ。エリナ・グリンの原作をクララ・パウが演じて以來「性的魅力」といふ意味になつたが、原作者エリナ・グリンは曰く「イットは即ち

それを所有するものより容易に流れ出し、それに接触するものを愉快地に打ち、魔酔力を伴ふ意味のものなり」と譯の分らぬ辯明をしたさうである。(『文藝春秋』1930年5月1日号 p376)

この解説で引用されている原作者の言葉は、前述した映画「IT」冒頭の署名入り文章の訳だと思われる。原作者による説明を「訳の分らぬ弁明」と切り捨ててしまっていることから、1930(昭和5)年の時点には、「イット」という流行語が、映画とは無関係に独り歩きをはじめたことがわかる。

(2) 「エロ」と「イット」の違いとは

「イット」の意味が拡大してくると、巷では「エロ」との違いは何かという戯言のような議論が登場する。もちろん「エロ」は昭和初期の社会風俗を表す流行語の代表で、「エロティック」の略である。「イット」という流行語は結局のところ「エロ」に回収されて消えていくのだが⁽⁵⁾、ここでは辛うじて使い分けられている1930(昭和5)年頃の「エロ」と「イット」のニュアンスの違いを確認しよう。

カフェの女給である木谷絹子は、自身の日記をもとに『女給日記』を1930(昭和5)年に刊行した。同書によると、木谷はある夜、客といっしょに「女給たちの魅力を採点する」という遊びをしている⁽⁶⁾。その採点項目となっているのが「エロ」と「イット」である。そのほかにも「手くだ」と「金慾」が採点項目となっている。この夜の出来事は日記の日付や内容から1929(昭和4)年と推測することができる。木谷によると「イットとは性的魅力のこと。エロとは肉感のこと。(木谷1930:87)」である。採点の対象となったのは9人の女給たちであるが、イット30点であるの対してエロが70点というケースもあれば、イットが100点でエロが60点というケースもある。客と女給とが共通の認識をもって「エロ」と「イット」を使い分けていたことになる。おそらく1929(昭和4)年時点では、この2つの言葉を使い分けることが、流行の最先端にいることの証となっていたのであろう。

磯部眞壽造は1930(昭和5)年11月刊行の『現代實話書きおろし 情怨暴露』のなかで、「エロ」と「イット」の違いについて次のような説明をしている。

エロとイットの相違であるが、どちらも同じ様な『色』としての存在があるが、多少その用途が違う様である。その違いをはき違へるとウルトラル・モーダンの仲間はずれにされる恐れがある。假令へば、『あの映畫はエロ味満點だ』と云ふが、『あの映畫はイット満點だ』とは云つて悪くはないが云はない。で、イットはエロと同じ様に『色』には違ひないが、主として女性の肉體を對象にした言葉である。(磯部1930:3-4)

磯部による流行語「イット」の解説は、辞書や辞典を含めたあらゆる解説のなかで最も明快である。映画「IT」から派生した流行語「イット」が「女性の肉體」を對象にした言葉であること、そして、類語「エロ」との使い分けができることが「モダン」であることを示したのである。

しかし、女性を「品評」する際に用いられていた流行語「イット」は、やがて、都市部に急増した新しい職業で働く女性たちに向かって使用されるようになっていく。

5. 働く女性たちに使用される隠語「イット」

「イット」が働く女性を評する際に使用されはじめた要因のひとつには、この言葉がモダン語でありながら隠語であるという使い勝手があった。中山由五郎は1931(昭和6)年11月刊行『モダン語漫画辞典』の「イット」の解説文のなかで、「一寸手輕には口から出されない意味を、兎も角、貴婦人淑女方の前でも臆面なく口に出せるやうにした女史の手柄たるや、實に感謝の外はない。(中山1931:41)」と述べている。中山は「イット」の使用例として、「『おい今度入社してきたタイピスト姫は、いやにイットを發散しやがるぜ』なぞと盛んに使はれる。(中山1931:41)」と説明している。中山の例示で「タイピスト」という職業が「イット」の對象になっていることに注目したい。中山が指摘しているとおり、あからさまでなく女性の性的魅力を話題に出せる言葉として「イット」は働く女性たちを尊



(写真3) 取材に応じた女性。女性の身体にむかって矢印が書かれている。『読賣新聞』1931年3月24日より。

する時に便利だったに違いない。

やがて「イット」という言葉は、女性の職業を紹介する文脈でも使用されるようになっていく。例えば、『読賣新聞』1931（昭和6）年3月24日朝刊11頁には、「モダン語訪問〔4〕これがイットだ やつとめつけて暫し夢心地」という執筆者不明の記事がある⁽⁷⁾。この記事で記者の取材を受けたのは、東京マネキン・クラブに所属する女性である。大規模な百貨店が各地で新規開業をしていた昭和初期、最先端の洋服を身につけてマネキン人形のように立っているマネキン・ガールと呼ばれる職業が新しい職業として脚光をあびていた。取材を受けた女性はマネキン・ガールのひとりである。記者は彼女に「あなたの持っていらっしゃるイットをぶちまけて頂きたい」と迫って困らせ、その押し問答を記事にした。困った彼女が顔を赤らめると、記者はやっとイットを感じたと言って満足する。〔写真3〕はこの記事に掲載されている女性の全身写真である。彼女の体に向かって、いくつも矢印が書かれていることに気づくだろうか。記事のなかに矢印の説明はないが、「半ばはだけた白い胸」「組合はされた脚のあたりの曲線」など、女性の身体を描写した文言が並んでいることから、この矢印は記者が「イット」を感じた箇所を示していることは明らかである。

読賣新聞社会部が取材した記事では、働く女性を説明する文脈で「イット」が用いられる例が他にもある。たとえば、1931（昭和6）年4月刊行の読賣新聞社会部編『彼と彼女は斯うして就職した：応用就職戦術』には、「その『おほほ』が 女給試験パス…イットの勝者」というタイトルの記事が掲載されている。銀座松屋の化粧品売場に勤めていた女性が有名カフェ「銀座會館」の女給採用試験に合格したのは、彼女が「イット」を振りまいたからであると記者は述べている（読賣新聞社会部1931：42）。また、『読賣新聞』1931（昭和6）年11月2日夕刊7頁には「赤襟嬢のイットが お客を呼ぶんだ ——とはホントでせうか」という見出しの記事で、バスの車掌という職業が紹介されている。当時はバスの車掌に女性が起用されるようになり、新しい職業婦人として注目を集めていた。記事では電気当局の「バスのはやるのは安いばかりぢやありません、白粉の香が矢張り人を呼ぶんです」という発言が紹介されている。

関東大震災後、急速に東京都市部の近代化・産業化が進み、女性たちが人前に立つ接客業に就きはじめた。しかし、人前に立つ職業への女性の進出は、男性たちから性的なまなざしの対象となることを伴っていたのである。

そのいっぽうで、働く女性たちに性的なまなざしが集まっていくことに違和感を覚えていた同時代人がいたことも指摘しておきたい。前掲『現代實話書きおろし 情怨暴露』の著者、磯部眞壽造である。磯部は同書のなかで、エロやイットが氾濫する時代を次のように述べている。

エロ全盛の現在に於ける、『色』の取扱ひ方は單に文學の上のみに止まらず、エロは廣く社會的に一種職業化したのではなからうか、即戀愛遊戲と云つた一部階級の專有物としての存在の範圍を脱して、女性の色ぼさは、あらゆる職業と階級を通じての商略手段として採用され出して來たのであらう。（磯部1930：4）

昭和初期当時、働く女性たちが性的対象化されていることは、カフェで働く女給たちや花街で働く芸妓たちの問題として扱われていた。しかし、磯部はあらゆる職業が性的まなざしの対象になっていると指摘している。流行語「イット」の用法を確認することで、昭和初期に働く女性たちが性的まなざしの対象となっていたという問題を浮かび上がってきた。

また磯部は、『『職業的エロの全盛時代』はまだ將來がある。現在はまだその段階の或は初めの二三段のみであるかも知れない。（磯部1930：8）』と未来を憂いている。磯部眞壽造なる人物の詳細が不明であること、同書には眉をひ

そめたくなるような女性蔑視に類する発言も多数見られることから、単純に磯部の発言を評価することはできない。しかし磯部が案じていた通り、現在においても働く女性たちが性的な対象で見られるという問題が起きていることは確かである。

6. いま、何を議論すべきか

これまで本稿では、昭和初期の流行語「イット」が発生した経緯と、その意味の拡大、使われ方に注目しながら、都市部を中心とした社会風俗について考察してきた。「イット」という言葉が映画のストーリーや主人公のイメージから離れ、単に「性的魅力」を意味する隠語として使用されるようになっていくと、「イット」は都市部に登場した新しい職業で働く女性たちを対象に用いられるようになっていった。性的なまなごしの対象となっていたのは、酒を提供する飲食店に勤めていた女性たちばかりではない。タイピスト、マネキン・ガール、百貨店の店員やバスの車掌までもが「イット」の有無によって対象化され批評されていた。

女性の社会進出が遅々として進まない日本において、その問題の元凶はどこにあるのだろうか。その答えを探すためにも、働く女性をとりまく「まなごし」の問題を、女性の社会進出の歴史とともにたどっていく必要があるだろう。女性たちがまなごしの対象化されてきた歴史に向きあうと、社会風俗に関する史料のほとんどが男性執筆者によるものであるという大きな壁が立ちはだかってくる。社会史を研究するうえで、女性を客体から主体へと変えることがいかに難しいのかを痛感する。とりわけ風俗史研究においては、常に対象化されてきた女性たちへのまなごしを、史料批判も含めながら再読することが求められているのではないだろうか。

注

- (1) [https://en.wikipedia.org/wiki/It_\(1927_film\)](https://en.wikipedia.org/wiki/It_(1927_film)) (2023年11月1日閲覧)。
- (2) <https://dictionary.cambridge.org/dictionary/english/it-girl> (2023年11月1日閲覧)。
- (3) <https://www.oed.com/search/dictionary/?scope=Entries&q=it+girl> (2023年11月1日閲覧)。
- (4) 藤木はアメリカの映画スターのイメージが日本社会への影響を与えるようになったのは大正中期からであるとして、「この種のイメージはスクリーン上に映し出されただけでなく、プロマイド、ピラ・チラシ、グラビア、広告、さらには『映画物語』、批評、詩、小説、漫談・漫画、手記、日記、伝記など様々な言説の形式に切り取られ、翻訳され、言及され、説明され、解釈され、そしておそらく映画館、街頭、商店、家庭を含む多様な場で見られ読まれ語られ始めた。(藤木 2000 : 5)」と指摘している。
- (5) 1933 (昭和8) 年3月刊行の伊藤晃二著『常用 モダン語辞典』(好文閣)には、「イット」について「性的魅力、性的牽引力。色気。直譯して『あれ』といひ『エロ』と同じ意味である(伊藤 1933 : 83-84)」との解説がある。
- (6) 木谷は、女給を採点するという遊びは、ポオル・モーランの小説『夜ひらく』を真似たものだと述べている(木谷 1930 : 87)。
- (7) 「モダン語訪問」という『讀賣新聞』の連載記事は、1931年3月19日の第1回から同年5月4日の第37回まで断続的に続いている。新しい俗語を紹介する記事で、通俗的な読み物になっている。「イット」の他にも、アベック、ランデブー、エロ、グロ、デモ、エキストラなどの語が採り上げられている。

参考文献

- Hilary A. Hallett 2022 *Inventing the IT GIRL- How Elinor Glyn Created the Modern Romance and Conquered Early Hollywood* : Liveright Publishing Corporation.
- Ledger Denny 2018 *It (1927): Style, Culture & a Twentieth Century Icon* : CreateSpace Independent Publishing Platform.
- 安藤更生、1931、『銀座細見』、春陽堂。
- 藤木秀朗、2000、「日本の近代性とアメリカの映画スター：クララ・パウのイメージ流通をめぐって」、『映像学』、65 (0)、5-24頁。
- 羽太鋭治、1930、『イットの研究』、汎人社。
- エリナ・グリーン著、松本恵子訳、1983、『イット』、奢瀟都館。
- 飯島正、1928、『シネマのABC』、厚生閣書店。
- 磯部真壽造、1930、『現代實話書きおろし 情怨暴露』、洋々社。
- 伊藤晃二、1933、『常用 モダン語辞典』、好文閣。
- 木谷絹子、1930、『女給日記』、金星堂。
- 中山由五郎、1931、『モダン語漫画辞典』、洛陽書院。
- 二戸儂秋、1927、「クララ・パウ」、国際情報社、『劇と映画』、第5巻12号(1927年12月号)、9頁。
- 小野田素夢、1929、『銀座通』、四六書院。

昭和初期の流行語「イット」にみる働く女性たちへのまなざし

小関孝子、2023、『夜の銀座史 明治・大正・昭和を生きた女給たち』、ミネルヴァ書房。

高田勝、1927、「クララボウを讃める」、松竹座編集部、『松竹座グラフィック』、第6巻4号（1927年4月1日発行）、14-15頁。

圓谷弘、1928、『カフェー文化の諸現象』、社会学徒社。

讀賣新聞社會部編、1931、『彼と彼女は斯うして就職した：応用就職戦術』、文明社。